

今日、文化芸術には、人々や社会に与える影響力があり、こうした文化の持つ力が「国の力」であることが世界的に認識されはじめてきている。このため、世界各国で文化力を高めることで、社会を活性化し国の魅力を高めて世界からの評価を高めようという文化政策における国際競争が展開されつつある。

そのような「文化芸術によるまちづくり」の動きが進められる中で、更なる取組の展開がなければ文化芸術に係る相対的な取組の遅れが生じかねない。

(7) 伝統産業の課題

生活様式の洋風化、海外等への生産拠点の移転による産地の空洞化、職人の高齢化、不況の長期化などによる需要の低迷、経済のグローバル化による海外製品の大量流入、国内の他の産地や海外との厳しい価格競争などにより、京都の伝統産業を取り巻く環境は多くの業種において、かつてない厳しい状況にある。

業界によって異なるものの、昭和45（1970）年から昭和55年前半をピークにして、出荷額は激減している。特に、和装産業の出荷額は、西陣織がピーク時の昭和58年と比較して平成17（2005）年は12.0%、京友禅がピークの昭和55年と比較して21.6%となっている。また、生産量では、京友禅は、ピークの昭和46年と比較すると約5%まで落ち込んでいる。また、後継者についても、平成15年度の京都市ものづくり産業調査の「後継者に関するアンケート」で、繊維関連業種（繊維関連業種3,425件のうち、2,926件（85.4%）が和装関連業種（平成18年11月現在）の事業者は、「事業継承したいが後継者がいない」は23.3%、「事業継承については未定・分からない」は43.9%となっており、更には、このように回答した事業者のうち64.8%が今後「廃業する」と答えている。

これまでから職人の高齢化が問題となっているが、それと共に、技術を受け継ぐ職人の養成にはかなりの期間を要することから、職人の養成方法、就業の入口づくりなどが望まれる。

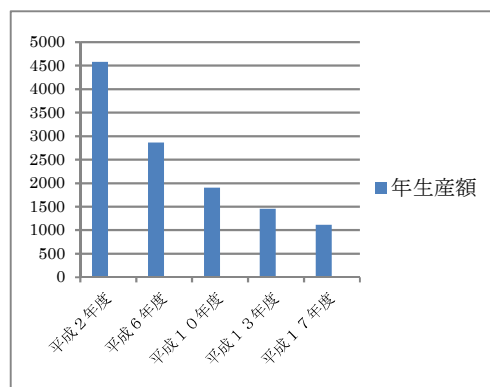
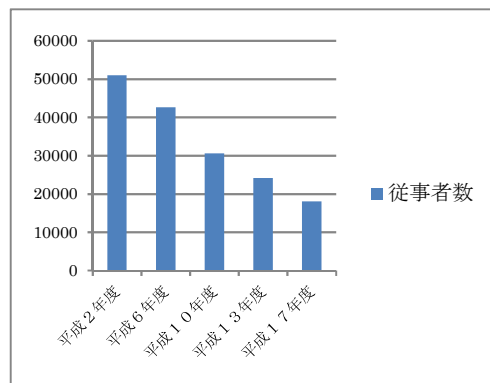
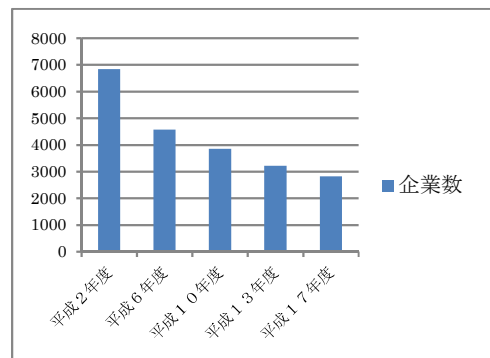


図3-10 伝統的工芸品（国指定17品目）
企業数・従事者数・年生産額の推移